

スリランカの仏教王権 —— アヌラーダプラ時代における王権とサンガ ——

藪内聡子

1 はじめに

アヌラーダプラ時代における紀元前 3 世紀、インドの王 Asoka の仏教弘布政策による派遣者の一人であった Mahinda 長老がスリランカに来島し¹、当時のスリランカの王 Devānampiyatissa (250–210 B.C.)² が仏教に帰依して以来、仏教はスリランカにおいて国教となった (Rahula[1956]ch.5). 在家者の頂点としての国王は最大の仏教支援者となり、dhamma に則って統治を行う転輪聖王 (Cakkavattin) の理想がスリランカに継承されたとされる (Rahula[1956] p.66, Paranavitana[1961]p.46). しかしスリランカの王は、国家守護のために軍事的英雄であることをも民衆から求められ、王の所行が仏教的価値観でなぞられつつも、次第にスリランカ独自の王権観が発展した。

国王は自らの支配の正当性を仏教に依拠し、サンガは国王に最大の支持者の姿を見出すという国王とサンガの相互依存の関係は時代を経て強固なものとなり、アヌラーダプラ時代初期において、在家者の頂点として菩薩と見なされた王は、アヌラーダプラ時代後期には、在家者のみならずサンガの頂点としても見なされ、仏陀に限りなく近い存在へとその権限を増強させ、サンガを統制する立場へと変容していった。

本稿は、スリランカの諸王が国家守護と仏教支援とをいかにに行い、その所行が仏教的見地においてどのように位置づけられたか、また王が仏教の支援者として、塔や寺院などの仏教建築物の造営、出家者に対する資具の供給をおこなうだけではなく、サンガ存続のための秩序の徹底へと次第に介入し、戒を守らない比丘の追放、サンガの規律の設定までをどのようにして指揮するようになったのか、それらの過程について、スリランカの正史とされる *Mahāvamsa* (Mhv.), *Cūlavamsa* (Cv.) を主体として用い、碑文資料で補いながら明らかにする³。

2 仏教守護と菩薩

スリランカの王が、史書においてはじめて仏教的価値観で表現されたのは、紀元前 2 世紀、ダミラ人 Elāra と闘って勝利をおさめたシーハラ王 Duṭṭhagāmaṇī (161–137 B.C.) の死に際してである。Duṭṭhagāmaṇī は、沙弥の生まれ変わりであり、仏教守護という責務を生まれながらにして担われ、王として輪廻し、この世に誕生したと Mhv. には伝承された。

¹ 各国へ仏教が伝道された模様は Mhv. ch.12.

² () 内は王の在位年代を示す。Nicholas&Paranavitana[1961] 所収の王統年代表 (pp.341–345) による。森 [1984]pp.319–338.

³ スリランカの歴史研究は極めて遅れており、歴史区分は未だ確定されていない。杉本 [1988] の紹介している分類では、先史時代を紀元前 2 世紀頃まで、古代を紀元前 2 世紀から紀元後 1255 年までとしており、これによるとアヌラーダプラ時代 (紀元後 11 世紀初頭のチョーラ朝による Anurādhapura 占領以前) は、先史時代と古代に含まれる。しかし、灌漑システムの確立と寺院封建制の発展との関連から、アヌラーダプラ時代後期から中世とみる見方もある。例えば Gunawardana[1979] は、Sena I (833–853 A.D.) の統治年代から中世として扱っている。

紀元前3世紀, Mahinda 長老により公式に仏教が伝道されたのち, 仏教は急速にランカー島に浸透し, シーハラ王の支援によって多くの寺院が建立された。しかし紀元前2世紀, インドのマウリヤ朝が滅亡して東南海岸地方のアーンドラ朝が急激に勢力を北方に伸ばし, 他方, インド半島南端部のチョーラ朝の人々をはじめとするダミラ人がスリランカ攻略に着手しはじめると, スリランカの王位はダミラ人に奪取される。ダミラ人 *Eḷāra* は, スリランカの首都 *Anurādhapura* にて即位後, 政策として仏教サンガに対して友好的態度を示したが, 最終的には, 三宝の徳も知らず⁴, 邪見を滅してはいなかったという評価が, Mhv. の編纂者 *Mahānāma* 長老によって下され⁵, シーハラ王朝ならびに仏教の権威回復と伝統復興をになった英雄として, *Duṭṭhagāmaṇī* が登場した (Mhv. ch.21)。

ときに島北部はダミラ人の王により支配され, 島東南部 *Rohaṇa* 地方を支配していた *Kākavaṇṇatissa* の妃 *Vihāradevī* に王子が生まれることを予見した六神通ある大長老は, *Vihāradevī* に病んでいる沙弥を看取るように命じる。 *Vihāradevī* は, 自分の子として生まれ変わることを望むように, 瀕死の状態の沙弥に祈念した。最初はそれを望まなかった沙弥も, *Vihāradevī* がサンガに対して医薬, 衣を寄進して懇願すると, 死ぬと妃の胎に宿った⁶。

このようにして生をうけた *Duṭṭhagāmaṇī* は, 12 歳にしてダミラ人に対する激しい敵愾心をもち, 16 歳にはすでに福德具わり, 名声高くして勇猛な英雄であった (Mhv. 22.78–87)。 *Duṭṭhagāmaṇī* は, *Rohaṇa* 地方の中心寺院 *Tissamahārāma* の比丘たちを前にして, 仏法を輝かすために *Mahavāli* 川の対岸ダミラ人の地に進軍することを宣言している⁷。 *Duṭṭha-*

⁴ *Ratanaggassa ratanattayassa guṇasāratam*

ajānanto pi so rājā cārittam anupālayam/ Mhv. 21.21.

最上の宝である三宝の徳が最高であることを知らないけれども, かの王は慣習を守護した。

⁵ *Agatigamanadosā muttamattena eso*

anupahatakudḍiṭṭhī pīdisim pāpuṇiddhim .../ Mhv. 21.34.

彼は, 非道を実行する罪から単に逃れることによって, 邪見を滅していないけれども, このような神通を得た。(agati については, 注 26 を参照。)

⁶ Mhv. 22.34ff.

*Evaṃ pi 'nicchamānassa atthāy' upāyakovidā
nānābhesajjavatthāni saṃghe datvātha yāci tam./
Patthesi so rājakulam, sā tam ṭhānam anekadhā
alamkaritvā vanditvā yānam āruya pakkami./
Tato cuto sāmaṇero gacchamānāya deviyā
tassā kucchimhi nibbatti, tam jānitvā nivatti sā/
rañño tam sāsanaṃ datvā raññā saha punāgamā.*

Sarīrakiccaṃ kāretvā sāmaṇerass' ubho pi te/ Mhv. 22.37-40.

このようにしても欲しくない(沙弥の)ために, 方法を熟知した(妃)は種々の医薬や衣服をサンガに施してさらに彼に懇願した。彼は王家(に転生すること)を望んだので, 彼女はその場所を様々に荘厳して, 礼拝して, 車に乗って去った。それから死んだ沙弥は, 妃が去りゆく間に彼女の胎に生まれた。それを知って, 彼女は立ち止まった。王にその知らせを送って, 王とともに(沙弥が死んだ場所に)戻った。彼ら二人は沙弥のために葬儀を営ませて...

⁷ *gantvā Tissamahārāmaṃ vanditvā saṃgham abravi:*

pāragaṇgaṃ gamissāmi jotetuṃ sāsanaṃ ahaṃ/ Mhv. 25.2.

Tissamahārāma に行つてサンガに礼拝して言った。私は仏法を輝かせるために川の向こう岸に行く。 (ダミラの王の支配地と *Duṭṭhagāmaṇī* の生誕した *Mahāgāma* 王朝支配の州とは, *Mahavāli* 川が境界となっていた。 Mhv. 24.4.)

gāmaṇīは、舍利を槍におさめて闘い⁸、自分の努力は決して王位安泰のためではない、仏法を確立するためであるとして軍隊を指揮し⁹、首都 Anurādhapura を奪回してシーハラ王朝を再興した。

Duṭṭhagāmaṇīは、ダミラ人 Elāra との戦闘の勝利後、人々を殺戮した懺悔の証のために、ダミラ人支配のもとに荒廃していた仏教諸施設の整備再建に努力した。Anurādhapura にそびえるスリランカ仏教の象徴ともいえる Mahāthūpa、布薩堂である Lohapāsāda 等の建立である (Mhv. chs.27–31)。Mahāthūpa の起工法要には、島内だけではなく、各国から比丘たちが集まった。英雄たる戦士を仏教徒の王とするには明らかに困難があるが、Duṭṭhagāmaṇīの戦闘は、Mhv. の主張するところでは、個人的な栄光のためではなく、仏法の確立のためであり、仏法を輝かせるためであると説明された¹⁰。Duṭṭhagāmaṇī英雄伝は、Cakkavatti-Sīhanāda-Suttanta¹¹等にみられる転輪聖王の理想、つまり鞭や剣によってではなく dhamma によって導くという、パーリ聖典における転輪聖王の姿とは明らかに隔たりがみられるが (Greenwald[1978])、異教徒からの侵略に対して、仏教を守護するために全力を尽くして闘った王の姿をサンガが認め、Mhv. の編纂者 Mahānāma 長老も、これを容認せざるを得なかったといえる¹²。

Duṭṭhagāmaṇīの死の床には、9 億 6 千万人の比丘が待坐した¹³。Duṭṭhagāmaṇīは善業帳 (puññapotthaka) を持って来させて書記官にそれを読ませ、自分の手でおこなったサンガに対する数多の功業をひとつひとつ想起し、Mahāthūpa の完成を弟の Saddhātissa (137–119 B.C.) に託して死んでゆく (Mhv. 32.25–62)。死の直後、王は再生して天から派遣された車に立ち、自らの善業の果を示すために、車上に立ったまま自らが建立を着手した Mahāthūpa を三度右繞礼し、Mahāthūpa と比丘たちに礼拝して兜率天へ昇ったと伝承された¹⁴。Mhv.

⁸ Duṭṭhagāmaṇīrājātha katvāna janasaṃgahaṃ

kunte dhātuṃ nidhāpetvā sayoggabalavāhana/ Mhv. 25.1.

そして Duṭṭhagāmaṇī王は人々を結集して、舍利を槍におさめさせて、車、軍勢、乗用獣類を率いて...

⁹ rājasukhāya vāyāmo nāyaṃ mama sadāpi ca

saṃbuddhasāsanasseva ṭhaṇāya ayaṃ mama/ Mhv. 25.17.

この私の努力は決して王位安泰のためではなく、この私の(努力は)正等覚者の教えの確立のためである。

¹⁰ Mhv. 25.2, 17. 注 7, 9 参照。

¹¹ DN. III, pp.58–79. 他、転輪聖王に関する主な経典は、AN. III, pp.147–151, DN. III, pp.142–179, SN. V, p.99.

¹² Mhv. 25.103–112.

Jotayissasī ceva tvaṃ bahudhā buddhasāsaṇaṃ,

manovilekhaṃ tasmā tvaṃ vinodaya narissara/ Mhv. 25.111.

あなたは仏法を多様に輝かせるであろう。それゆえ王よ、あなたの心のとまどいをふり払いなさい。

¹³ Gilānapucchanaṭṭhāya āgatehi tato tato

channavutikoṭṭiya bhikkhū tasmīṃ āsuṃ samāgame./ Mhv. 32.10.

(王の)病気を見舞うために、そこかしこよりやって来た(比丘たち)によって(集団ができた)。その集団には9億6千万人の比丘がいた。

¹⁴ Cavitvā taṃkhaṇaṃ yeva Tusitā āgate rathe

nibbattitvā ṭhito yeva dibbadeho adissatha./

Katassa puññakammaṃ phalaṃ dassetum attano

mahājanassa dassento attānaṃ samalaṃkatam/

rathatṭho yeva tikkhattuṃ Mahāthūpaṃ padakkhiṇaṃ

の編纂者 Mahānāma 長老はさらに, Duṭṭhagāmaṇīは弥勒世尊 Metteyya の一番弟子になるであろうと予言した¹⁵.

3 理想的菩薩王

このように史書において Duṭṭhagāmaṇīがはじめて Metteyya と関連付けられてその死を語られたのであるが, その後紀元後 3 世紀, Vohārikatissa (214–236 A.D.) の治世において, 大乘仏教, あるいはその一派とされる Vetulya (Vetulla) がスリランカに普及したのちに¹⁶, はじめて王が菩薩として形容されるようになった (Yabuuchi[2007]). その第一の例は Sirisaṃghabodhi (251–253 A.D.) であり, あらゆる有情を慈悲する大士 (mahāsatta) と表現されている¹⁷. 五戒を保っていた Sirisaṃghabodhi は¹⁸, 理想的な王として Cv. には綴られている. 島の人々が干害を被ったことを知り, 慈悲哀憐の心を以て自ら Mahāthūpa の庭内の地に伏して, 天が雨を降らせて自分を浮かべ上げることがなければ, 自分はたとえ死んでもこの場所を立ち上がるまいと決意すると, 全ランカー島に雨が降り, 島中の凶作の難を排除することができた. 盗賊がいると, 王は盗賊を連れて来させたが密かに逃がし, 死者の屍を密かに持ち来たらせて焼き, 盗賊の難を除いたという. 赤眼として知られた一人の夜叉は, 人々の眼を赤くさせて死に至らせ, 彼らを食べていたが, 王はこの夜叉を法の威力によって引き寄せた. 夜叉に人民を与えることを要求されたが, 我を食えと王が言うと夜叉は村々の供物で満足することを承知し, それ以後王は村の入り口において夜叉に供物を施すよう命じた. このようにして島の疫病は消滅したとされる (Mhv. 36.74–90).

大臣である Goṭṭhābhaya が王位篡奪を狙ったため, 戦闘を望まなかった王は独り逃げたが, 懸賞にかかった自分の首を, 自分に食を施そうとしてくれた道ゆく男に与え, 最期を遂げた¹⁹.

Haṭṭhavanagallavihāraṃsa (Hvv.) は 13 世紀に著作されたパーリ語の書であるが, す

katvāna thūpaṃ saṃghaṃ ca vanditvā Tusitaṃ agā./ Mhv. 32.75–77.

(王は) まさにその瞬間に没して兜率 (天) からやって来た車に再生して, 天身 (となつて) 立ち, 仰がれた. 自己のなした善業の果を示そうと, 莊嚴した自己を大衆に示しながら, 車上に立ったまま Mahāthūpa を三度右繞礼して, 塔とサンガを礼拝して兜率 (天) へ赴いた.

¹⁵ Duṭṭhagāmaṇīrājā so rājanāmāraho mahā

Metteyyassa bhagavato hessati aggasāvako./ Mhv. 32.81.

かの Duṭṭhagāmaṇī王は偉大で, 王の名にふさわしく, 弥勒世尊の一番弟子となるであろう.

¹⁶ Mhv. 36.41. 森 [1989]p.422. Cv. の表記では Vetulla となっている. Cv. 42.35; 78.22.

¹⁷ Mahāsattena tenevaṃ sabbabhūtānukampinā

mahārogaḥayaṃ jātāṃ dīpadīpena nāsitaṃ./ Mhv. 36.90.

このように生じた大病の怖畏は, あらゆる有情を慈悲する島の燈火であるかの大士によって取り除かれた.

¹⁸ Rājā Sirisaṃghabodhīti vissuto pañcasīlavā

Anurādhapure rājāṃ duve vassāni kārayi./ Mhv. 36.73.

Sirisaṃghabodhi として知られた王は, 五戒を保っており, Anurādapura で 2 年間王事を行った.

¹⁹ Mhv. 36.91–97. Paranavitana[1959a] p.190.

Saṃghabodhi ahaṃ rājā, gahetvā mama bho sirāṃ

Goṭṭhābhayaṃ dassēhi, bahuṃ dassati te dhanāṃ./

Na icchi so tathā kātuṃ, tassatthāya mahīpati

nisinno yeva amari, so sīsaṃ tassa ādiya./ Mhv. 36.95–96

私は Saṃghabodhi 王である. 汝, 私の頭を捕えて Goṭṭhābhaya に示せ. 汝に多くの財を与えるであらう

べてを Sirisaṃghabodhi の人生、そして王の活動が行われた場所における宗教的記念物の建立の記述にあてている²⁰。

Sirisaṃghabodhi の崇高な行動は、王権の理想を推進するだけでなく、後世の王に玉座の称号として、彼の名を採用することとなった (Gunawardana[1979]p.173)。Cv. において Sirisaṃghabodhi という称号を最初に有したのは Aggabodhi II (608–618 A.D.) である²¹。Aggabodhi II の前任者であり、Aggabodhi II のおじの Aggabodhi I (575–608 A.D.) は、最上菩提 (aggabodhi) に達することを志していたが²²、Aggabodhi I により建立された多くの仏教建築物の中には、Sirisaṃghabodhi と名づけられた pariveṇa がある²³。これらは、Sirisaṃghabodhi の徳を偲び、人々に Sirisaṃghabodhi の行為に従う心を持たせるために建立されたのである²⁴。

Sirisaṃghabodhi の次に菩薩との関連でもって史書に記されているのは Buddhādāsa (340–368 A.D.) である。Buddhādāsa は王者の十法を有し²⁵、四種の非道 (agati)²⁶を排し、四種の摂事 (saṃgahavatthu)²⁷をもって人々を摂取し、諸菩薩の行を生類に示しつつ、あたかも父がその子らをあわれむが如くに、生類をあわれんだという²⁸。王は仏陀にも比較され、王の 80 人の息子は、例えば Sāriputta というように、仏陀の 80 人の弟子になぞらえた名前を有していた (Cv. 37.176–177)。Buddhādāsa は畜生にも慈善を施し、蛇の腹部の病気を治

う。彼はそうにしようとしなかった。大地の主は彼のために座ったままにして死んだ。彼は王の頭を取って...

²⁰ 橘堂 [1997] pp. 20–21, von Hinüber[1996]p.96. Hvv. の著者は不詳である。

²¹ Paranavitana[1959b] p.365. しかしパーリ語の文学作品においては Mahānāma (410–432 A.D.) が最初であるとされる。

²² Mahānāganarindassa bhāṇeyyo subhāgiyo
so Aggabodhi rājāsi aggabodhiḥatāsayo./ Cv. 42.1.

Mahānāga 王の幸運な甥で、最上菩提に至ることを志したかの Aggabodhi は、王となった。

²³ Adā Malayarājassa Dāthānāmaṃ sadhitarāṃ
pariveṇaṃ Sirisaṃghabodhināmaṃ ca kārayi./ Cv. 42.10.

マラヤの王には Dāthā という名の自分の娘を与えて、Sirisaṃghabodhi という名の房舎をも造営させた。

Cf. pariveṇa はアヌラダプラ時代初期には寺院の房舎を指したが、のちには寺院学校を意味するようになった。Geiger[1960]p.193.

²⁴ Aggabodhi III (632 A.D.) も Sirisaṃghabodhi の称号を有していた。Cv. 44.83.

Aggabodhi III の前任者は Silāmeghavaṇṇa (623–632 A.D.) であったため、以後、Sirisaṃghabodhi と Silāmeghavaṇṇa の称号は連続して用いられた。すなわち Sirisaṃghabodhi の称号を有する王の前任者は、Silāmeghavaṇṇa の称号を有し、また、Silāmeghavaṇṇa の称号を有する王の後継者は、Sirisaṃghabodhi の称号を有するものとされた。EZ. II, p.9.

²⁵ 王者の十法とは Cv. においては列挙されていないが、Nandiyamigajātaka において、dāna (施与), sīla (持戒), pariccāga (捨離), ajjava (正直), maddava (柔和), tapa (修養), akkodha (不瞋), avihimsā (不害), khantī (耐え忍ぶこと), avirodhana (逆らわぬこと) と記されている。Ja. III, p.274.

²⁶ chanda (欲), dosa (瞋), moha (痴), bhaya (怖畏)。

²⁷ dāna (布施), peyyavajja (愛語), atthacariyā (利行), samānattatā (同事)。

²⁸ catasso agatī hitvā kārayanto vinicchayaṃ
janaṃ saṃgahavatthūhi saṃgahesi catūhi pi./
Cariyaṃ bodhisattānaṃ dassento sakkhi pāṇinaṃ
pitā va putte so satte anukampiṭṭha bhūpati./ Cv. 37.108–109.

四種の非道を排して裁判を行わせながら、また四種の摂法によって人々を摂取した。諸菩薩の所行を生類に示しながら、あたかも父が子 (あわれむ) 如く、友であるかの大地の主は衆生をあわれんだ。

してやった。その御礼として蛇は供養のために自分の持っている摩尼珠を王に寄進すると、王は Abhayagiri 所蔵の仏陀の石像の眼となしたという²⁹。このことから、Buddhadāsa は、Abhayagiri に好意をもっていたことが示唆される。Theravāda を奉ずる Mahāvihāra の比丘たちに Vetullavāda を受容するように要求したのは、彼の祖父、Mahāsena (276–303 A.D.) であった (Mhv. ch.37)。Ruvanvālisāya Pillar-Inscription には、Buddhadāsa は、Buddhadāsa Mahāsena と言及されており (EZ. III, p.122), Buddhadāsa が Mahāsena の行為を尊重していた可能性も否定できない。しかし Mahāvihāra を無視していたわけではない。25 肘の殿楼のある孔雀 (mora) と名づけられた pariveṇa を、Mahāvihāra の敷地内に建立した (Cv. 37.172)。

Buddhadāsa の長男の Upatissa I (368–410 A.D.) は、王者の十善業を取り、十波羅蜜をも充たし、四摂事を実践した³⁰。Buddhadāsa の次男である Mahānāma (410–432 A.D.) は、特別に Abhayagiri に好意を示していたようである。彼は Lohadvāra, Ralaggāma, Koṭipassāvana という三つの寺院を建立して Abhayagiri の比丘に与えた³¹。Theravāda を奉ずる比丘たちに対して Dhūmarakkha 山³²に寺院を建立して与えたのは、第一妃の計らいであった³³。Cv. の伝承により、Buddhadāsa とその息子たちは、菩薩王の理想を意識していたと思われる。

4 政治的イデオロギーとしての菩薩王

しかしアヌラダプラ時代中期頃から、菩薩的行為を実践する王が、必ずしも Vetulla の教義を受け入れた Abhayagiri に対して好意的ではない傾向も生じた。

その名のごとく、最上菩提 (aggabodhi) の境地を目指したという表現で最初にあらわされているのは、前述した Aggabodhi I (575–608 A.D.) である³⁴。このような名を有し

²⁹ Cv. 37.112–123.

Disvā sukhitaṃ attānaṃ pannago so mahīpatiṃ
pūjetuṃ tassa pādāsi mahaggaṃ maṇim attano/
silāmayāya sambuddhapaṭimāya akārayi

maṇiṃ taṃ nayaṇaṃ rājā vihāre Abhayuttare/ Cv. 37.122–123.

自分が快癒したのを見て、その蛇は王に供養しようと、自分の高価な摩尼を彼 (王) に与えた。王はその摩尼を、Abhayuttara (Abhayagiri) 寺院における正等覚者の石像の目にさせた。

³⁰ dasāpuñṇakriyā hitvā dasa puñṇakriyādiyi

rājadhamme ca pūresi rājā pāramitā dasa/

gaṇhi saṃgahavattūhi catūhi ca catuddisaṃ,

Mahāpālimhi dāpesi rājā rājānubhojanaṃ/ Cv. 37.180–181.

王は十種の不善業を排して、王者の法である十善業を取り、十波羅蜜を充たし、四種の摂事によって四方を摂取し、王は Mahāpālī(施食堂)にて王の食事の残余を布施させた。

³¹ Lohadvāra-Ralaggāma-Koṭipassāvanavhaye

tayo vihāre katvā 'dā bhikkhūnaṃ Abhayuttare/ Cv. 37.212.

Lohadvāra, Ralaggāma, Koṭipassāvana と称される三つの寺院を造営して、Abhayuttara (Abhayagiri) の比丘たちに与えた。

³² ボロンナルワ時代の Parakkamabāhu I (1153–1186 A.D.) の治世において、三派統合の首座をつとめた Mahākassa が所属していた Diṃbulāgala のことである。

³³ Vihāraṃ kārayitvāna Dhūmarakkhamhi pabbate

mahesiyā nayanādā bhikkhūnaṃ theravādināṃ/ Cv. 37.213.

Dhūmarakkha 山に寺院を造営させて、第一妃の計らいによって Theravāda を奉ずる比丘たちに与えた。

³⁴ Cv. 42.1. 注 22 参照。

てはいるものの、Aggabodhi I は、Theravāda を尊重した。Aggabodhi I の治世下において Jotipāla 長老がインドより来島し、争論によってランカー島の Vetulla 説者を排斥した (Rahula[1956]p.103)。州知事 (āḍipāda)³⁵である Dāṭhāpabhuti が、このことをひどく恥じて Jotipāla を打とうとしたが、その瞬間に腫れ物が生じ、このことから Aggabodhi I は Jotipāla に信心を起こし、保護したという³⁶。最上菩提 (aggabodhi) を望むことと、Vetulla に反対することは、矛盾があると思われるが、この頃から、王の聖性と菩薩的観念とが融合し、政治の頂点としての王が上座仏教を信奉する Mahāvihāra 派に個人的な好意的感情をもち、それ以外の教義の排斥を容認しながら、かつ自分は菩薩の理想を追求し、王権の正当性が保持されるという事態が生じている。

Aggabodhi IV (667-683 A.D.) も、Sirisaṃghabodhi の称号を有する王であった³⁷。Aggabodhi IV は、三派³⁸の比丘たちが共同で使用する Mahāpālī 食堂を増築し、不殺生を実行させた。また分に応じて惜しみなく地位を与え、さらに技能、種姓にふさわしい待遇をした。王は、また比丘たちをみると、場所を問わず、paritta を唱えさせた³⁹。自己の先祖である王が Theravāda を奉ずる比丘たちに加えた数々の妨害を耳にし、Mahāvihāra 派の朽廃した vihāra, pariveṇa を修復して、収量豊かな村を寄進した⁴⁰。Aggabodhi IV が亡くなると、多くの人々はいたく悲しみ嘆き、王の茶毘の灰を自分の薬として用いたという⁴¹。

Sena I (833-853 A.D.) は仏の境地 (buddhabhūmi) に至ることを願った⁴²。彼の行いは賞賛をもって Cv. に描かれている。王の生類を見ることは、あたかも愛児の如くであった。先王のなした行事に励み、dhamma を益する行事は以前に催されなかったものをもまた行い、島に住む比丘、比丘尼、眷属、魚類、獣類、鳥類にもなすべきつとめは悉く行い、乞食者、求財

³⁵ 王子がこの称号を有していた。Paranavitana[1959b]p.366。10世紀の碑文によると、āpā, māpā, mahapā,あるいはmahayāに就任したのちに、全島の王として就任している。āpāはパーリ語ではāḍipādaである。

³⁶ Tada eko mahāthero Jotipālakanāmakō
parājesi vivādena dīpe Vetullavādino/
Dāṭhāpabhutināmo 'tha āḍipādo 'tilajjito
hatthaṃ ukkhipi taṃ hantūṃ, gaṇḍo saṃjāyi taṃkhaṇe./
Rājā tasmim pasīditvā vihāre yeva vāsai; ... Cv. 42.35-37.
時に Jotipāla という名の一人の大長老がいた。争論によって島に住む Vetulla を説く者たちを破った。その時 Dāṭhāpabhuti という名の州知事がひどく恥じ入って彼を打とうと手を挙げた。その瞬間に腫れ物が生じた。王は彼に信心をおこして寺院に住ませた。

³⁷ Accaye Hatthadāṭhassa Aggabodhikumārako
kaniṭṭho rājino āsi Sirisaṃghādibodhiko./ Cv. 46.1.
Hatthadāṭha の没後、王の弟の Aggabodhi 王子は Sirisaṃghabodhi (という称号で王) となった。

³⁸ Mahāvihāra 派, Abhayagiri 派, Jetavana 派のことである。

³⁹ Cv. 46.3-5. Mahānāma (410-432 A.D.) の治世において Buddhaghosa が着手した作品として、*Parittaṭṭhakathā* も言及されている。Cv. 37.226.

⁴⁰ Cv. 46.8-9. pariveṇa については注 23 を参照。

⁴¹ katvā ālāhane tassa kiccaṃ sabbaṃ asesato
tass' ālāhanabhasmaṃ pi katvā bhesajjam attano./ Cv. 46.37.
火葬場において、すべて余すところなく彼の葬礼を行って、彼の火葬の灰をも自分の薬として...

⁴² Pāsādaṃ so va kāresi vihāre Jetanāmake
anekabhūmiṃ bhūmino buddhabhūmigatāsayo/ Cv. 50.65.
仏の境地に至ることを志したかの大地の主は、Jeta という名の多層の殿樓を造営させた。

者、比丘、バラモンのためには莫大なる財物と善美なる王饌とを施したという⁴³。しかしながら、この誉れ高い行為と同時に、Sena I は親族の Mahinda を王位安泰のために殺したことをもまた、Cv. には秘すことなく伝承されている⁴⁴。

5 王のサンガに対する権限の拡大

南インドのパンドゥ朝のスリランカ侵略の報復として、遠征に成功した Sena II (853–887 A.D.) ののち、Udaya II (887–898 A.D.) と Kassapa IV (898–914 A.D.) の治世においては、島東南部 Rohaṇa 地方の支配者との間に、王位継承にかかわる内部抗争があった (Cv.50.12–42; 51.27–51, 94–125; 52.4–9)。しかし次の Kassapa V (914–923 A.D.) の治世については、政治的には安定していた時代といえるであろう。Kassapa V は学者としても名高かった⁴⁵。彼は *Dhammapadaṭṭhakathā* の復註でもあり語彙集でもある *Dhampiyā-aṭuvā-gāṭapada* の著者としても知られている (Godakumbura[1955] pp.31–33)。また黄金板に論蔵を書写させ、*Dhammasaṅgaṇī* の書写を種々の宝にて飾り Anurādhapura の中央に最勝の堂を建立して安置した⁴⁶。同様のことは、Kassapa V の治世と年代付けられた Abhayagiri から発見された Anurādhapura Slab-Inscription にも記されている。またこの碑文には、王は比丘である師の前で dhamma を説いたとある (EZ. I, pp.46–47, 52)。そして Sena IV (954–956 A.D.) は、Mahāvihāra の Lohapāsāda に集まった三派の比丘たちにとりまかれて経の解釈をした⁴⁷。

初期のスリランカにおいては、dhamma を保持する比丘の立場が尊重され、比丘は聖なる福田であり、比丘は説法者、在家者は聴聞者として dhamma に関わった。それは在家の代表とされる王についても同様であった。紀元前 2 世紀の英雄とされる Duṭṭhagāmaṇī は、法施は財施に勝ると聞いて、Lohapāsāda で比丘たちを前に *Maṅgalasutta* (Sn. pp.46–47) を説こうとしたが、比丘たちへの恭敬の念から遠慮し、結局それはできなかった⁴⁸。しかし今や

⁴³ Cv.50.1ff.

Mahādānaṃ pavattesi yācakānaṃ dhanesinaṃ
bhikkhūnaṃ brāhmaṇānaṃ ca manuññaṃ rājabhōjanaṃ./ Cv. 50.5.
乞食者、求財者、比丘、バラモンに、莫大な財物と善美なる王饌を施させた。

⁴⁴ Mahindaṃ paraṭīraṃ so gataṃ yojiya mārayi;

evaṃ so suvisodhesi rājapaccatthike 'khile./ Cv. 50.4.

彼は対岸に赴いた Mahinda を、手配して殺させた。このように彼はすべての王敵を掃蕩した。

⁴⁵ Cv.52.37–41.

Laṅkāraṇṇe pi ṭhatvā kathitatipīṭako sabbavijjāpadīpo .../ Cv. 52.82.

ランカー島の王位にも即いて、三蔵を講じ、すべての学芸の燈明であり、...

⁴⁶ Soṇapaṭṭe likhāpetvā Abhidhammapīṭakaṃ tadā

Dhammasaṃgaṇikaṃ potthaṃ nānāraṇabhūsitāṃ/

katvā nagaramajjhamhi kāretvā gehaṃ uttamaṃ

taṃ tattha ṭhapayitvāna parihāraṃ adāpayi./ Cv. 52.50–51.

その時黄金板に論蔵を記させて、種々の宝で飾った Dhammasaṃgaṇī の聖典をつくり、都の中央に最勝の堂を造営させて、そこにそれを安置させて、敬意を払わせた。

⁴⁷ Suttantaṃ Lohapāsāde nisinnō vaṇṇayī tadā

nikāyattayavāsihi rājā so parivārito./ Cv. 54.4.

その時かの王は、三派に住む比丘たちに取りまかれて、Lohapāsāda に座して經典を解釈した。

⁴⁸ 片山 [1982] p.25.

Dhammadānaṃ mahantaṃ ti sutvā āmisadānato

王の立場は強大になり、仏教を繁栄させるために自ら積極的に説法をもするようになっていた⁴⁹。

なお *vat-himi* という語は比丘にしか用いられないのであるが、8 世紀から 10 世紀に作成されたと推定される種々の碑文において、王に対しても尊称として、表彰する意味で使用されていたことが確認される。それらは、Mahinda II (777–797 A.D.) の治世下の Rāssahela Rock-Inscriptions, Udaya I (797–801 A.D.) の治世下の Kirigallāva Pillar-Inscription, Udaya III (935–938 A.D.)⁵⁰ の治世下の Badulla Pillar-Inscription, また Kaludiyapokuṇa Inscriptions において、例としてみられるものである (EZ. IV, p.174; II, p.4; III, pp.75, 258)。

6 釈迦族の系譜と王

Mhv. によれば、紀元前 5 世紀、ランカー島に住んでいた夜叉 (*yakkha*) を征服して島内を平定し、上陸地点 Tambapaṇṇi に都を築き、全島支配を享受したとされる Vijaya は、王位に即くため王族の妃を娶るべくバンドゥ朝から妃を迎えて第一妃とした。しかしその王妃との間には子どもがなかったため⁵¹、Vijaya の死後、故郷のラーラ国の Sīhapura から Sumitta の末子の Paṇḍuvāsudeva がスリランカの王として来島し、また Paṇḍuvāsudeva の妃として、仏陀の叔父にあたる釈迦族の Amitodana の孫娘 Bhaddakaccānā が迎えられた⁵²。仏教伝道が公式になされた当時のスリランカの王 Devānampiyatissa (250–210 B.C.) の祖父の Paṇḍukābhaya は⁵³、この Paṇḍuvāsudeva と Bhaddakaccānā の息子の甥にあたる。

Mānavamma 王朝の後半の 10 世紀頃まで、自己の祖先が釈迦族の系譜にあると主張するスリランカの王は存在しなかったのであるが、学者としても名高い Kassapa V (914–923 A.D.) の治世の 3 年目とされる Mādirigiriya Pillar-Inscription において、はじめてそのような記述があらわれる (EZ. II, pp.30, 32. Gunawardana[1979]pp.173–174.). 自己の祖先は Okāvas (P. Okkāka) の系譜に遡るというものである⁵⁴。同じ主張が Kassapa V の継承者た

Lohapāsādato heṭṭhā saṃghamajjhamhi āsane/
osāressāmi saṃghassa Maṅgalasuttam iccham
nissino osārayitum nāsakkiṃ saṃghagāravā./ Mhv. 32.42–43.

法施は財施よりも (功德が) 大きいと聞いて、Lohapāsāda の階下のサンガの中央の座で、サンガに対して Maṅgalasutta を説こうと望みながら座についたが、サンガへの恭敬の念から説くことができなかった。

⁴⁹ dhamma の指導をした在家者は王だけではない。Mihintale Tablets によれば、Abhayagiri の Cetiyaḡiri には在家 (*ādura damīn*) も教師として雇われていた。EZ. I, p.96.

⁵⁰ Udaya III の治世においては、王が寺院領である tapovana に逃げ込んだ諸大臣を追って tapovana に侵入し、彼らの首を刎ねるという事件が起こった。その所行に憤って Rohaṇa に去った比丘たちに、王子たちがひれ伏して陳謝するという事態も生じている。この事件では、寺院領内においては王の権限よりも比丘の権限の方が強大であったことを示している。Cv. 53.13 ff.

⁵¹ 夜叉女 (*yakkhiṇī*) の Kuvaṇṇā との間には二人の子女をもうけたとされる。Mhv. 7.60.

⁵² Mhv. 7.37–39, 72–74; 8.5–12, 18–20.

Vijaya の父 Sīhabāhu は獅子 (*sīha*) を殺したので Sīhala と呼ばれ、Sīhabāhu と関係あるものはすべて Sīhala と呼ばれるようになった。このようにして獅子の国 Sīhala と呼ばれる国家が建設されたとされる。Mhv. 7.42.

⁵³ Devānampiyatissa は Paṇḍukābhaya の息子の Muṭasiva の次男である。Muṭasiva には 10 人の王子がいた。Mhv. 11.5–6.

⁵⁴ しかしこの祖先が釈迦族の王としての Mhv. に現れる Okkāka と同じものかは疑問ではある。Mhv. 2.11–12. 釈迦族の系譜については土田 [1985].

ちにおいても認められる。Dappula IV (924-935 A.D.) の治世と年代付けられる Kataragama Pillar-Inscription においては、王子 Mahinda IV (S. Lāmāni Mihind) は Paṇḍukābhaya の子孫であることを主張している (EZ. III, pp.222-223, 224)。より詳細な著述が Abhayagiri の境内から発見された Anurādhapura Slab-Inscription の断片に存在する。それは Mahinda IV (956-972 A.D.) の治世 7 年目に遡るものであり、そこには、Mahinda IV は、輝かしい釈迦族の頂点であり、仏陀の父である Suddhodana に遡る系譜にあり、Paṇḍukābhaya の子孫である Okāvas の血統にあるとあらわされている (EZ. III, pp.227, 228)。同様に、Mahinda V (982-1029 A.D.) の治世と年代付けられる Polonnaruwa Pillar-Inscription においても、Mahinda V が Okāvas の系譜にある Suddhodana の子孫であることが記されている (EZ. IV, pp.64, 65)。これはスリランカの王室が仏陀の系譜にあるということを主張し、系譜を通じて彼らがスリランカの王室たる権利があること、そして仏陀の子孫が、サンガの存在を約束され、仏陀が来島して浄めたスリランカの国土を支配するのに相応しい⁵⁵、という意義付けを強調したということである。このような情勢は、10 世紀、またそれ以前の時期において、シーハラ人の王たちが南インドからの侵略者や、地域的な反逆者たちに脅かされるような緊迫した政治的闘争の時代であったことと、無関係ではないであろう。

Mhv. の伝承では、首都 Anurādhapura を確立した Paṇḍukābhaya は、釈迦族として仏陀の父 Suddhodana ではなく、叔父の Amitodana の子孫としている (Mhv. 8.18)。しかしアヌラダプラ時代後期の王室は、自分たちの祖先を、仏陀の叔父 Amitodana ではなく、仏陀の父 Suddhodana と主張し、自分たちをより仏陀に近いものとして訴えたことになる。これらの碑文は、シーハラ人の王たちがスリランカを支配するための権利を合法化するために、伝承を意識しつつ改変を入れて記したものといえる。

このように、スリランカの王は仏陀の系譜にあることが主張され、比丘たちの学的指導をも行うほどに権限の増大した王は、限りなく仏陀に近い存在として表現されるようになる。Udaya IV (946-954 A.D.) の治世下の碑文、Badulla Pillar-Inscription においては、王が Sirisaṃghabodhi の称号を付与されていることを記すと同時に、同王の死を涅槃 (S. pirinivīyan) と表現している (EZ. V, pp.185, 188-189)。涅槃という語は、普通は仏陀や阿羅漢に対して使用されるのであるが、この時期には王に対しても使用されるようになった。

Mahinda IV の治世下にはヴァッラバ国からの急襲があったが、将軍 Sena により阻止することができた (Cv. 54.12-16)。Mahinda IV の治世における Jētavanārāma Slab-Inscription によれば、王は仏陀に身を捧げる君主であり、釈迦族の頂点であり、他ならぬ菩薩のみ、すなわち仏陀になる運命にある者のみが、仏教の繁栄したランカー島の王になると記されている。そして仏陀の鉢と衣を守る目的で、王になるのだと宣言している (EZ. I, pp.237, 240)。王は Atulā 寺院に金の仏像を建立したが、それは王である自分の様相であったという。これはおそらく王が、仏陀、あるいは仏陀になりうる存在であることを、象徴的に表明したものであろう⁵⁶。Vessagiri Inscriptions によれば、Mahinda IV は涅槃への道が保証されていた (EZ. I, pp.32-33, 34)。そしてこの Vessagiri Inscriptions と Mihintale Tablets によれば、

⁵⁵ 仏陀の三度の来島については、Mhv. 1.19, 44-47, 71-74 を参照。

⁵⁶ EZ. I, pp.223, 229。しかしこの試みは Mahinda IV において知られているのみである。

Mahinda IV も Sirisaṃghabodhi の称号を有していた。また王者の十法 (S. dasa-rad-dham) を具えていたことも記されている (EZ. I, pp.25, 26 ; 32, 34; 91, 98). Kassapa V (914–923 A.D.) も同様に、王者の十法を具えていたと、Cv. には伝承されている (Cv. 52.43).

7 サンガの浄化

菩薩として位置づけられてきた王は、10 世紀に至り、ほとんど仏陀と同程度の地位を与えられるようになった。そうしてサンガの浄化を指示し、あるいはその実行を指揮する資格を有し、また浄化されたサンガの存在は、王による支配の正当性をより強固なものにするという、相互依存の関係が明確にされた時代といえよう。

紀元前 1 世紀、サンガは Mahāvihāra から Abhayagiri が分裂するという事態が生じ、ときの王 Vaṭṭagāmaṇi Abhaya (89–77 B.C.) はこれを黙認せざるを得なかった (Mhv.33.95–99)。しかしそれ以降、サンガ内に生じた論争に王が介入し、解決を試みた記録が残されている。これは、王の権力がサンガよりも次第に強大になる過程を示唆している。

王が正法行 (dhammakamma) を行うことによってサンガの浄化を行った伝承は、アヌラダプラ時代中期以降にみられ、Moggallāna I (495–512 A.D.)⁵⁷, Moggallāna III (618–623 A.D.)⁵⁸, Silāmeghavaṇṇa (623–632 A.D.)⁵⁹, Aggabodhi VII (772–777 A.D.)⁶⁰, Sena II (853–887 A.D.)⁶¹, Kassapa V (914–923 A.D.)⁶² の治世下に Cv. に残されている (Gunawardana[1979] p.178)。この中で、Silāmeghavaṇṇa の治世下の正法行は Abhayagiri 内部のものであった。王が比丘のサンガ追放を断行したとされるのは、Kaṇḍirajānutissa (31–34 A.D.)⁶³, Goṭṭābhaya (253–266 A.D.)⁶⁴, Mahāsena (276–303 A.D.)⁶⁵, Silāmeghavaṇṇa

⁵⁷ Bandhitvā sāgarārakkhaṃ dīpaṃ cākāsi nibbhayaṃ.

Dhammakammena sodhesi saddhammaṃ jinasāsanaṃ./ Cv. 39.57.

海上の守護を堅固にして、怖畏なき島とし、正法行によって勝者の教えを浄めた。

⁵⁸ Sabbam Vesākhapūjādiṃ cāritānugataṃ akā,

dhammakammena sodhesi sabbam sugatasāsanaṃ./ Cv. 44.46.

毘舍佉月の供養をはじめとしてすべてを慣例に従って行い、正法行によって善逝の教えすべてを浄めた。

⁵⁹ rājānaṃ upasaṃkamma dhammakammaṃ ayācatha;

rājā ten' eva kāresi dhammakammaṃ vihārake./ Cv. 44.76.

王に謁して正法行を求めると、王は彼に寺院で正法行を行わせた。

⁶⁰ Dhammakammehi sakkaccaṃ sodhesi jinasāsanaṃ,

vinicchinto dhammena chindi kūṭṭakārake./ Cv. 48.71.

正法行によって恭しく勝者の教えを浄め、法に則って裁決して、邪な告訴人を滅ぼした。

⁶¹ Tulābhārassa dānena dīnānāthe sa tappayi,

dhammakammena sodhesi nikāyattayam ekato./ Cv. 51.64.

彼は (自分の) 目方に等しい (財の) 布施によって、貧しく孤独な者たちを満足させ、正法行によって三派をともに浄めた。

⁶² Sodhetvā sāsanaṃ sabbam dhammakammesu satthuno

gahetvā navake bhikkhū akās' āvāsapūraṇaṃ./ Cv. 52.44.

正法行において大師の教えすべてを浄めて、新しい比丘をとらえて、住院を満たした。

⁶³ Uposathagharattaṃ so nicchini Cetiyavhaye,

rājāparādhakammamhi yutte satṭhi tu bhikkhavo/

sahoḍḍe gāhayitvāna rājā Cetiyapabbate

pakkhipāpesi Kaṇḍiravhe pabbhāramhi aslake./ Mhv. 35.10-11.

彼 (王) は Cetiya(山) と称される (寺院) において布薩堂の訴訟を裁いた。しかし、王に対する罪に関

(623–632 A.D.)⁶⁶, Aggabodhi VII (772–777 A.D.)⁶⁷, Kassapa IV (898–914 A.D.)⁶⁸の治世下である。

9世紀から10世紀にかけての正法行の内容は碑文として残されており、現在確認できるものも存在する。それらは寺院の規律である *Vihāra Katikāvata* を記しており、国王が関与して規則を議決し、王の名でもってその規則を発布した。アヌラダプラ時代後期における *Vihāra Katikāvata* の代表的なものは以下の通りである (橘堂 [1981]p.310, [2002] p.304)。

<i>Vihāra Katikāvata</i>	発布時期あるいは発布した王
1. Jētavanārāma Sanskrit Inscription	: 9世紀前半 (EZ. I, pp.1–9.)
2. Anurādhapura Slab-Inscription	: Kassapa V (914–923 A.D.) (EZ. I, pp.41–57)
3. Puliyāṇ-kuḷam Slab-Inscription	: Dappula IV (924–935 A.D.) (EZ. I, pp.182–190)
4. Kaludiyapokuṇa Inscription	: Sena IV (954–956 A.D.) (EZ. III, pp.260–269.)
5. Mihintale Tablets	: Mahinda IV (956–972 A.D.) (EZ. I, pp.75–113.)
6. Vessagiri Inscriptions	: Mahinda IV (956–972 A.D.) (EZ. I, pp.29–39.)

これらの *Vihāra Katikāvata* の制定は、寺院とその財産の管理に関する規律の設定が主たる目的であり、さらに出家者の生活規定、新参出家者の採用や教育、儀式の執行、寺院雇用者である在家者の行為、労働の報酬に関する規定までにも制限を加え、サンガ内の論争の解決を意図しているものであった。

Vihāra Katikāvata の発布は王のみがサンガに一方的に規律を強制したわけではなく、比丘たちの会議により制定されてはいるが⁶⁹、発布が可能であったのは、王が実質的にサンガの長であることの認識を共有していたからであろう。王の監督的支配は、サンガに対する王の権威を増強させ、続くポロンナルワ時代における、王が主導した *Mahāvihāra* の受戒の

わった 60 名の比丘たちを、王は所持品とともに捕らえさせて、破戒の徒たちを Cetiya 山のカニラと称される窟中に投げさせた。

⁶⁴ Vetulyavādino bhikkhū Abhayagirivāsino
gāhayitvā saṭṭhimatte jinasāsanakaṇṭake/
katvāna niggahaṃ tesam paratīre khipāpayi. ...Mhv. 36.111-112.

勝者の教えの敵である、Abhayagiri に住む Vetulla を説く比丘 60 人を捕らえさせて、彼らを破門して対岸に投棄させた。

⁶⁵ Vinicchiya mahāmacco tadā dhammikasaṃmato
uppabbājesi dhammena taṃ anicchāya rājino./ Mhv. 37.39.

そのとき如法の者として選ばれた首座の大臣は、法に従って裁決し、王の不同意にかかわらず、彼を還俗させた。

⁶⁶ aññe tattha sataṃ bhikkhū Jambudīpe khipāpayi,
saranto tassa ussāhaṃ parisodhesi sāsaṇaṃ./ Cv. 44.79.

(王は) その時他の 100 名の比丘たちを閩浮州に投棄させ、彼の努力を憶いながら、教えを浄化した。

⁶⁷ Cv. 48.71. 注 60 参照。

⁶⁸ Niharitvāna dussile nikāyattavāsisu
gāhāpesi nave bhikkhū āvāse tattha tattha so./ Cv. 52.10.

彼 (王) は三派に住む破戒の徒たちを放逐させて、新しい比丘たちを、そこかしこの住院に住まわせた。

⁶⁹ 例えば Mahinda IV については、Abhayagiri に関わる規律を設定する際に、Abhayagiri、そして Cetiyaḡiri の両方から比丘を招請している。EZ. I, pp.91, 98.

みを承認したサンガの統合 (Yabuuchi[2004]), ダンバデニヤ時代におけるサンガ内の階層性成立への原動力となったことが推測される。さらにサンガ全体に遵守を強要した *Sāsana Katikāvata* の発布は、アヌラーダプラ時代に作成されたこれらの *Vihāra Katikāvata* が下地となり、発展したものであるということがいえよう。

8 おわりに

以上みてきたように、仏教が国教として進展したスリランカにおいては、国王の立場は、在家者の頂点としての仏教の支援者にとどまらず、アヌラーダプラ時代後期に至っては、サンガの長としてサンガを統制する位置にまで引き上げられた。国王はサンガを自己の手中に収めることによって、王権の正当性を堅固にし、続く時代において、世俗的世界の自己の権限をさらに増強させてゆくことになる。

〈略号および使用テキスト〉

- AN. *Aṅguttara-nikāya*, ed. R. Morris and E. Hardy, 5 vols. London, PTS, 1885–1900.
 Cv. *Cūlavamsa*, ed. W. Geiger, 2 vols. London, PTS, 1925–1927.
 DN. *Dīgha-nikāya*, ed. T.W. Rhys Davids and J.E. Carpenter, 3 vols. London, PTS, 1889–1911.
 EZ. *Epigraphia Zeylanica*, ed. and tr. Archaeological Survey of Ceylon, 1904–.
 Hvv. *Haṭṭhavanagallavihāravaṃsa*, ed. Godakumbura, C.E., London, PTS, 1956.
 Ja. *Jātaka*, ed. V. Fausboll, 6 vols. London, PTS, 1877–1896.
 Mhv. *Mahāvamsa*, ed. W. Geiger, London, PTS, 1908.
 Sn. *Suttanipāta*, ed. Dines Andersen and Helmer Smith, London, PTS, 1913.
 SN. *Samyutta-nikāya*, ed. L. Feer, 5 vols. London, PTS, 1884–1898.

(参考文献)

- 片山一良 [1982] 「説法 (dhammadesanā) と聞法 (dhammasavaṇa) — パリッタ儀礼の基本構造 —」『日本佛教學會年報』47, pp.21–37.
 橘堂正弘 [1981] 「Katikāvata — Daṇḍabadeṇi Katikāvata の比丘の教育 —」佐々木教悟編『戒律思想の研究』京都：平楽寺書店, pp.307–325.
 [1997] 『スリランカのパーリ語文献』東京：山喜房佛書林.
 [2002] 『現代スリランカの上座仏教教団』東京：山喜房佛書林.
 杉本良男 [1988] 「文化の伝統」千葉正士編『スリランカの多元的法体制』東京：成文堂, pp.19–35.
 土田龍太郎 [1985] 「釋迦族の系譜」日本仏教学会編『釈尊観』京都：平楽寺書店, pp.101–111.
 森 祖道 [1984] 『パーリ佛教註釈文献の研究』東京：山喜房佛書林.
 [1989] 「スリランカの大乗仏教について」『印度学仏教学研究』38(1), pp.420–425.

Geiger, Wilhem.

- [1960] *Culture of Ceylon in Mediaeval Times*, Heinz Bechert (ed.) Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Godakumbura, C.E.
- [1955] *Sinhalese Literature*, Colombo: The Colombo Apothecaries' Co.
- Greenwald, Alice.
- [1978] "The Relic on the Spear: Historiography and the Saga of Duṭṭha-gāmaṇī," in Bardwell L. Smith (ed.), *Region and Legitimation of Power in Sri Lanka*, Chambersburg: ANIMA Books, pp.13–35.
- Gunawardana, R.A.L.H.
- [1979] *Robe and Plough: Monasticism and Economic Interest in Early Medieval Sri Lanka*, Tucson: The University of Arizona Press.
- Nicholas, C.W. and S. Paranavitana.
- [1961] *A Concise History of Ceylon*, Colombo: Ceylon University Press.
- Paranavitana, S.
- [1959a] "Lambakaṇṇa Dynasty: Vasabha to Mahāsena," in H.C. Ray (ed.), *History of Ceylon*, vol.I, part I, Colombo: Ceylon University Press, pp.179–193.
- [1959b] "Civilisation of the Period: Economic, Political and Social Conditions," in H.C. Ray (ed.), *History of Ceylon*, vol.I, part I, Colombo: Ceylon University Press, pp.352–377.
- [1961] "The Rise of Buddhism in India and Its Introduction to Ceylon," in C.W. Nicholas and S. Paranavitana (ed.), *A Concise History of Ceylon*, Colombo: Ceylon University Press, pp.33–53.
- Rahula, Walpola.
- [1956] *History of Buddhism in Ceylon : The Anuradhapura Period, 3rd Century BC – 10th Century AC*, Colombo: M.D. Gunasena&Co.
- von Hinüber, Oskar.
- [1996] *A Handbook of Pāli Literature*, Berlin: Walter de Gruyter&Co.
- Yabuuchi, Satoko.
- [2004] "Kingship and Saṅgha in the Polonnaruva Period," *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 52(2), pp.947–949.
- [2007] "The Ideal of the Bodhisattva King in Sri Lanka and Reform of the Saṅgha," *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 55(3), pp.1136–1139.

2008.2.29 稿

やぶうち さとこ 東洋大学非常勤講師

The Buddhist Kingship in Sri Lanka —The Kingship and the Saṅgha in the Anurādhapura Period—

Satoko YABUCHI

This article considers the relationship between the Saṅgha and the kingship of Sri Lanka during the Anurādhapura period, in which the legitimacy of the rule of the king was based on Buddhism. The character of a king was evaluated by Buddhist values in Sri Lanka, where Buddhism became the state religion, although the king was also required to be a warrior and a hero against destroyers of the Buddhist Order. The king, who was compared to the Bodhisatta as the head of the laity in the early Anurādhapura period, came to rank above even the Saṅgha and control it in the late Anurādhapura period, although he was in fact part of the laity.

In the second century B.C., King Duṭṭhagāmaṇī, the most famous hero in the Anurādhapura period, was the first figure whose demise was related in the chronicle as being associated with Bodhisatta Metteyya. Then, after the introduction of the doctrine of *Vetulla* in the third century A.D., the acts of the king were described as those of the Bodhisatta. In the early Anurādhapura period, the kings who pursued the ideal of the Bodhisatta tended to show favorable feelings for the Abhayagiri *nikāya*, which received the doctrine of *Vetulla*. However, this tendency did not always appear after the mid-Anurādhapura period, because the concept that the king was sacred was in harmony with the ideal of the Bodhisatta, and the political ideology of the Bodhisatta king became widely accepted.

In the late Anurādhapura period, around the tenth century, the legitimacy of the kingship came to be founded on the claim of the king being a blood relative of the Buddha. The kings' claim that they were descendants of the line of the Buddha greatly helped to strengthen and justify their power politically as well as religiously. Despite being laity, some kings composed Buddhist literature and preached the *dhamma* to monks. Only a person who is a Bodhisatta, i.e. destined to eventually become the Buddha, came to be considered qualified to be a king of Sri Lanka. Further, the king's demise came to be expressed as *nibbāna* around this time. The king, who had attained a status almost comparable to that of the Buddha, came to direct or implement the purification of the Saṅgha. Moreover, the purified Saṅgha strengthened the legitimacy of the rule of the king. Therefore, the interdependent relationship between the king and the Saṅgha became more concrete and definite.